

# 東京学芸大学 留学体験記 小宮澄夏



ロンドン大学東洋アフリカ研究学院（2024年8月～2025年7月）

E類多文化共生教育コース 小宮澄夏

## 私が留学を考えたのは、一人の女の子との出会いがきっかけでした

私が留学を志したきっかけは、大学2年生の秋に出会った1人の女の子でした。

当時、私は難民支援団体のボランティアとして、日本で暮らす難民の子どもたちの学習支援をしていました。そこで出会った少女は、ロヒンギャ難民の家庭に生まれ、日本で育った小学生です。

明るく好奇心旺盛な彼女。しかし、肌の色や文化、宗教といった「周りとの違い」を理由に、心ない言葉を投げかけられ、傷つくことも少なくありませんでした。ある日、作文で表彰された彼女が、笑顔でこんな話をしてくれました。

「『黒くて気持ち悪い』って言われて、すごく悲しかった。

でもね、結局はみんな同じ人間。だから、みんな仲間だって信じてるんだ」

彼女のまっすぐな言葉に、私はハッとさせられました。

「なぜ、こんなに優しい子が傷つかなければならないんだろう」

「誰もが自分らしく笑える社会を作るために、私にできることは何だろう」

彼女が教えてくれた問いへの答えを探したい。

もっと広い世界に出て、多様な価値観の中で自分を磨きたい。

その強い思いが、私を留学へと踏み出させてくれました。



## 運命に導かれた「開発学」と「トビタテ留学JAPAN」への挑戦

留学先では、「絶対に開発学を学びたい！」という譲れない軸ができていました。当初、イギリスの大学は私の大学の協定校にはありませんでした。それでも諦めきれず、自力で留学先を探していたところ……なんと、私が出願する年にSOASが協定校に加わったのです！

世界第2位の開発学を誇る大学が、最高のタイミングで選択肢に。

「これはもう、行くしかない！」と、迷わず出願を決めました。

一方で、私の心にはもう一つの思いがありました。

「大学で理論を学ぶだけで本当にいいのだろうか？ 途上国のリアルな現場を知らなくていいのか？」

せっかく越境するなら、未知の世界であるアフリカの地に足を踏み入れたい。そうして私は、理論と実践の両方を叶えるために文部科学省が募集している奨学金である「トビタテ！留学JAPAN」を利用して、イギリス、フィンランド、ウズベキスタン、ケニア、タンザニアの計5か国へ留学することができたのです。



## 挫折、そして「弱さ」と向き合ったSOASでの日々

念願だったSOASでの開発学の授業。しかし、そこでの毎日は決して易しいものではありませんでした。

周りを見渡せば、ジャーナリストを兼任する教授をはじめ、国連職員を親に持つ学生、途上国出身の情熱あふれる若者たち。世界中から「本気で世界平和を志す」多様なバックグラウンドを持つ人々が集まっていました。

圧倒的な知見と熱量を持つ彼らに囲まれ、私は自分の意見をうまく言葉にできず、悔しさを抱えて帰る日々が続きました。

「なぜ、私はネイティブじゃないんだろう」「日本人の私に何ができるの？」

伝えたい想いはあるのに、言葉が喉の奥で止まってしまう。情けなくて、授業の後には先生の前でポロポロに泣いてしまったこともあります。

「泣いても仕方ない。英語力は一晩で劇的に変わらないけれど、今できることをひたすらやろう」

そう決意してからは、なりふり構わず行動しました。大人数の前では難しくても、一対一なら伝えられる。そう気づいてからは、毎週のように教授やチューターの研究室の門を叩き、個別で対話を重ねました。

クラスメイトにも勇気を出して、「英語が苦手だから、助けてほしい」と素直に打ち明けました。すると、彼らは快く放課後の勉強に付き合ってくれたり、ノートを貸してくれたり……。

そのお返しに日本食をごちそうしたり、一緒にお好み焼きを作ったりする中で、本当の信頼関係が生まれていきました。

「弱さを超えるには、まず自分の弱さと向き合うしかない」

スマートな留學生活ではなかったかもしれませんが、でも、泥臭くあがいたからこそ得られた絆と自信は、私にとって何物にも代えがたい宝物になりました。



(チュートリアル先生と)

## ケニアの赤土の上で知った、「教育」の本当の意味

SOASでの学びを糧に、次に向かったのはケニアの小さな村にある小学校でした。

学校の寮に住み込み、水はバケツで川から汲みに行く生活。

朝6時から、村の誇りをかけたスポーツ大会のために泥だらけになって練習する子どもたち。

ひたすら走って、跳んで、踊る。

その圧倒的なエネルギーに触れ「学校って、こんなに生き生きした場所だったんだ」と、あたたかい気持ちになりました。

## 「勝手に」始めた、青空教室

ケニアの学校は先生が足りず、自習になる日も少なくありません。

それでも、子どもたちは毎日制服を着て、誰かが来るのを教室でじっと待っています。

「せっかく来たのに、何も学ばずに帰るなんて、もったいない！」

そう思った私は、空き教室を探して「勝手に」授業を始めることにしました。もちろん教科書もカリキュラムもありません。私が旅した世界の話や、日本の文化。

目を輝かせて聞き入る子どもたちを見て、「完璧じゃなくても、まずは動き出すことに価値があるんだ」と教わりました。



## 留学の出会いを経て、芽生えた願い

一ヶ月間、家族のように過ごした子どもたち。夕方の川で「すみかー！ー！」と笑顔で駆け寄ってくる彼らの瞳に、誰かに必要とされることの喜びを初めて知りました。

けれど、同時に自分の「無力さ」にも直面しました。  
日本から来た一学生の私には、彼らの貧困や不平等を解決する力がない。  
「私、何もできていない」と、絶望した夜もありました。

でも、その悔しさが私の中に新しい火を灯しました。

「今度は、もっと力をつけて戻ってこよう」  
「ビジネスや社会を動かす力を身につけて、  
この子たちの“チャンス”を作れる人になろう」  
この留学で出会ったすべての人たちに会った  
ことが、今の私の原動力です。

"Karibu sana (心から、ようこそ)"



(毎日通っていた図書館5階建て)